



「家庭内捨て子物語」

著者 入江健二

入江健二さま、はじめの小説を上梓され、おめでとうございます。

「創作です。日本では（ラジオ日本）で放送されたそうです」私は手紙を読みながら、彼の渋いほにかみの笑顔が浮かんできた。

創作とは、現実や作家の思いがまじりあった虚虚実実のかけひきなのです。

ほんやりグズ二郎の苦しみを書いた、この作品は

第一部 若葉

第二部 青空

によって構成されています。私は二回にわけて感想を述べたいと思います。

まさに「家庭内捨て子物語」です。

長男の洋行、三男の勝男は父の期待の子である。仏壇の鐘叩き棒が畳に落ちていた。ただそれだけの事に長男、三男は「僕じゃない」で通るのに、二郎は「正直

山中真知子



に言え」と父のいじめが始まる。兵学校の教官として鍛えた父の平手打を受ける。

最後には「ウソつき」呼ばわりをされる。叩かれた痛みだけでなく、心がこわれていくのだ。次男の野呂二郎は余分の子だったと父は悔むのだ。「青すたんボーフラ」父の田舎の言葉である。

「顔色が悪くて、ボーフラのように弱い子」なのである。野呂二郎は難産の子で、肉体の缺陷も多く、頭も鈍い。

家庭内暴力は深まるばかりである。小学生になった二郎は、夢にすがって生きた。いかに乗って海の島へ家出しよう。「ロビンソン・クルソー」漂流記」などが助けになった。

二郎は夢の世界にもぐりこみ読書好きになった。フランスが生んだ偉大な医学者「ルイ・パスツールの伝記」など読み始めた。二郎は医者になりたいと思つた時、胸が熱くなるような

嘗て味わった事のない、不思議な感じだった。

一九五四年、父はフルブライト奨学金で、アメリカの新学期に向かつて出発。二郎は父がいなくなつて、いじめから開放された。母は父の渡米前は四十六キロあったのに、二年後は三十五キロに落ちた。そんな時、「留学期限が一年延長」母はがっかり。二郎は慰め役である。

一九五九年、二郎は東京都大学不合格。後に予備校の入試に合格。

二郎の頭に一つだけ長所が隠されていた。「なかなか覚ええないが、一度覚えると忘れない」その長所がこの時期に効果を表した。

一九六〇年、成績上位一〇〇人の名前が並んだ。これまで二郎の名前が出た事はない。五十九の数字の下に野呂二郎があった。名前の周りだけがほんのりと明るく見えたのだ。

三日間に渡る入学試験は

続く。「もし駄目なら死ねばいい。どうせ歓迎されずに生きていた自分なんだから」そんな云われると、私は読みながら、本気で応援したくなる。

秋の午後の陽射しが入る

明るい教室の中で教授の抑揚のない声が遠ざかる。二郎は窓の外の黄ばみ始めたイチョウの葉が揺らいで、秋の日光を弾くありさまをボンヤリと眺めている。二郎も私も、自然の美しさで救われる。幾度もなぐさめられる。

「一九六二年度 東都大学医学部 合格者」巻き紙にはそう書いてあり、貼り付けられました。

「野呂二郎」の四文字が目

に飛び込んできました。

「助かった、死なずにすむ」二郎は思いっきり深呼吸しました。吹いてきた風が、二郎の頬をなでて通り過ぎました。二郎は思いっきり深呼吸しました。すでに高く昇った春の陽が、二郎の少しいびつな顔を照らしていました。

難産の時、引張り出された頭はいびつなまま、生涯いびつなのだ。

第一部、若葉は終る。

私は疲れ切つてグツタリした頭で「二郎、よく生き

抜いたね」と二郎を抱きしめた。残された片目もほんやりの坐ったきり老人の私も、命ある限り、生き抜かねばならない。人はみな、何らかの苦しみを背負つて生きていくのだ。

二郎は家庭内で誰の味方でもない。家出の夢や、自然の美しさに救われて、人を恨むこともなく道を築いていった。二郎は五歳の時から家庭内暴力に苦しみながら、苦しんでいる人の味方になりたいと言う人間に成長したのだ。私など、十四歳からの喘息で生涯苦しみながら、健康な人を恨みっぽく思つたりしたもの。坐ったきり老人がどんなに有難いことか、寝たきりの人だっているのだ。食物が咽を通らず、管で栄養をとって生きていく人もいるのだ。

二郎は一九五八年、リストカットで自殺しようと思つた事もあったが、「自分のように死にたくても死ねない人間がいるのに、世の中には病気のため生きてたくても生きられない人がいる」

「ヨシッ、無茶な話でも医者になるぞ」最後になって二郎の心意気を思い出しております。